

論文

——シンポジウム2「ヴィクトリア朝の書簡——国政から私信まで」

シャーロット・ブロンテのラブレター ——公と私の関係

川崎 明子

序：シャーロット・ブロンテと手紙

本論文は、地方に在住しながら1840年代の郵便改革の多大な恩恵を受けた人物として作家シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) を取り上げ、ラブレターをめぐる彼女の公と私の複雑で独特な関係を明らかにするものである。シャーロットの実生活におけるラブレターは、受信したもの、送信したもの、閲覧したものの3種に大別できる。本論文ではまず受信したラブレターを確認後、最も重要なラブレターである留学先の恩師エジェ (Constantin Heger, 1809-96) に送信したラブレターを考察する。さらに広義のラブレターとして、出版社に作品刊行を依頼する手紙、片思っていた出版社社長に送った作品原稿にも議論を広げる。また、シャーロットが読んだ母マライアのラブレターを紹介するとともに、女友達に宛てた一見ラブレター風の手紙についても論じたい。

ブロンテはヨークシャーの田舎で育ち、ベルギーに留学したり首都ロンドンやその他の地に短期滞在したりはしたが、生涯のほとんどをハワースの父の牧師館で過ごした。近隣に住んでいない人との交流は、時折訪問し合う以外は、文通に限られていた。つまり彼女の社会生活の大部分は文通によって成立していた。地理的、経済的、文化的制約がある中で、彼女の社会生活を充実させ、人生の開拓を可能にし、そしてラブレターの送受信を簡便にしたのが新しい郵便制度である。

郵便改革前の1830年代までのイングランドにおいて、郵便は費用も時間もかかるものであった。郵送料決定は複雑な計算を要し、その人件費が高い料金に反映した。郵送料は配達時に受取人が支払うシステムだったため、

送り手は相手の負担を考慮しなけりばならなかつた。これを改革したのがローランド・ヒル (Rowland Hill, 1795-1879) で、郵送料を一律一ペニーに統一することで、郵送料算出のコストと時間を大幅に削減し、差出人による前納を可能にした。切手や、郵便料金を価格に上乗せした封筒も発明され、差出人はこれらを購入して手軽に投函できるようになった (Campbell-Smith 125-35)。この全国統一ペニー郵便 (Uniform Penny Post) は1840年1月10日に開始され、この年の手紙の数は前年から倍増した (Campbell-Smith 140)。

ペニー郵便開始の2日後の1840年1月12日、23歳だったシャーロットは親友エレン・ナッシー (Ellen Nussey, 1817-97)宛の手紙で「このペニー郵便を最大限活用するつもり」と宣言し (Smith vol. 1, 208)、実際に新郵便制度を大いに利用することになる。1843年にはハワースにも郵便局ができた (トールマレン 17)。配達速度も鉄道網拡大と連動して大幅に上昇し、ハワースから送った原稿は、投函の翌日にはロンドンの出版社に届いた (トールマレン 148)。切手は便利に使うことができ、シャーロットは出版社に切手を貼った返信用封筒を送ることもした (Barker, *The Brontës* 620)。

シャーロットは姉妹の中でも手紙を書くことを好み、残存する手紙だけでも約860通ある。ちなみにアン (Anne Brontë, 1820-49)の手紙は5通、手紙を書くことを好まなかつたエミリー (Emily Brontë, 1818-48)の場合は短いメモが3つしか残っていない (Alexander and Smith 295)。シャーロットのもう一人の親友で知的な議論をしたと思われるメアリー・テイラー (Mary Taylor, 1817-93)は、受け取った手紙を1通をのぞきすべて破棄したので (トールマレン 148)、実際シャーロットは残存するよりずっと多くの手紙を書いている。シャーロットにとって行動とは第一に物を書くことであり、その書く行為は創作と手紙書きに二分されていた。そしてこれから見るように、両者は多様な形で交錯し、独特な公私関係を形成してゆく。

シャーロットは生涯を通じて、異なる人に異なる文体の手紙を送った。初めて手紙を出したのは13歳の時で、1829年9月23日に滞在中の知人宅から父パトリック (Patrick Brontë, 1777-1861)に近況を知らせた (Smith vol. 1, 105; Barker, *The Brontës* 194-95)。この後、同様に遠隔地からハワースの家族に宛てたり、16歳で学校を卒業後は学友エレンにハワースから手紙を

出したりした。郵便改革の年である1840年を迎えたのは、いくつかの赴任先で教師業をして挫折し、これ以外で働かずにすむよう牧師館で私塾を開校する計画を立てた頃である。その計画の一環としてフランス語習得のためベルギーに約2年留学し、そこでエジェに恋をし、帰国後に報われないラブレターを送ったのである。

エジェとの文通を諦めた後も、手紙を通しての行動は続く。エミリーやアンの病状を、医学誌の症例報告風にまとめて高名な医師に送り、一種の遠隔診療を試みた(川崎『ブロンテ小説における病いと看護』20-23; Kawasaki 118-20)。出版社に作品の出版を持ちかけた時は、カラー・ベルという男性名でビジネスライクな手紙を書いた(Harman 209)。同じ出版社でも自分の作品を刊行することになったスミス・エルダー社の人たちには、また別のペルソナを被った。将来夫となるアーサー・ベル・ニコルズ(Revd Arthur Bell Nicholls, 1819-1906)とは、結婚に反対する父に隠れて文通をしたが、これらのラブレターは残っていない。

1. シャーロット・ブロンテが受信したラブレター：バレンタインカード、求婚の手紙、ファンレター

シャーロットが受信したラブレターとして、まずバレンタインカードがある。1840年2月14日、ブロンテ姉妹は父の助任司祭のウェイトマン(Revd William Weightman, 1814-42)から、初めてのバレンタインカードをもらった。ウェイトマンは三姉妹それぞれに詩を作り、匿名性を高めようと、ハワースの郵便局はまだ開業していなかったので、わざわざ10マイル歩いて投函した。ペニー郵便が開始した1840年の手紙の量が前年より倍増したのは、バレンタインデーのラブレターの大幅増加も一因だった(内藤86)。1850年2月14日には、平日の5割増の40万通の手紙が投函されている(星名130)。ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)が1850年に共作したスケッチにも、カードが飛び交うバレンタインデーの郵便局の様子が活写されている(宮丸163)。

次に、より深刻な求婚の手紙がある。シャーロットは結婚前に3人から求婚されたが、うち2人は手紙を使った。まず1839年3月5日に、親友エレン・ナッシーの兄ヘンリー(Revd Henry Nussey, 1812-60)に求婚された。

1839年の7月か8月には、プライス (Revd David Pryce, 1811-40) がハワースを訪問し、数日後にいきなり求婚の手紙を送ってきた。当時、遠隔地にいる人と通信手段は手紙に限られたため、求婚を手紙で行うことはさほど不自然ではない。1851年には、ほぼ文通のみの付き合いだったスミス・エルダー社の主任ジェイムズ・テイラー (James Taylor, ?1817-74) が、インドに赴任する前にハワースを訪問し求婚したようである。求婚前に彼が書いた手紙と求婚後にインドから書いた手紙は、テイラーが結婚を望んだ相手に宛てたラブレターといえよう。

最後に、『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847) で成功して有名作家となったからは、ファンレターをもらうようになった。中には、かつて自分が有名詩人に対してしたように、自作の原稿を読むことを依頼する手紙もあった(川崎「ブロンテと手紙」5-6)。

2. シャーロット・ブロンテが送信したラブレター1：エジェ宛の4通の手紙

1842年2月から1844年1月にかけて、シャーロットはブリュッセルに留学した。1年目はエミリーも一緒だった。留学先のエジェ寄宿学校は、エジェ夫人が開校した女子高で、彼女の夫コンスタンタンは別の男子校の教師だったが、夫人の学校でも修辞学と文学を教えていた。シャーロットより7歳年上の彼は、既に13年の教歴を持ち結婚して子供もいたので、26歳で学生の身分のシャーロットからみて、ジェイン・エアにとっての20歳ほど年長のロチェスターのような、人生の大先輩に見えたかもしれない。

シャーロットはエジェからフランス語のエッセイの指導を受け、書くことに関する客観的視点や具体的技術を得た。シャーロットも彼に英語を教えるようになり、いつしか恋に落ちた。エジェへの思慕が募るにつれ、夫人への憎悪も強まったようである。夫人は、シャーロットが到着後まもなく4人目を出産し、留学2年目には5人目を妊娠したが、その姿は様々な感情を引き起こしたに違いない。結局夫人との関係が悪化した状態で帰国することになるが、留学の目的であった学校の設立と経営は、はからずも憎悪するエジェ夫人のキャリアを模倣する試みとなった。

帰国後の1844年7月から1845年11月にかけて、シャーロットはエジェに手紙を出す。現存するのは4通だが、その内容からシャーロットはもっ

と出しており、エジェも最低1回は返事をして、手紙を半年に1通に制限するよう注意したことがわかる。4通目の手紙の追伸が英語である他はすべてフランス語で書かれている。最初の3通はエジェが破り捨てたが、夫人が拾って縫い合わせたり貼り合わせたりした状態で残っている。

ヨークシャーとブリュッセル間の郵便については、郵便船による海外郵便は送料が高かったので、大陸に行く知り合いがいれば手紙をまとめて託し、ベルギーやフランスに入ってから投函してもらった。反対にベルギーからの手紙も、イングランドに帰国する知り合いに運んでもらい、イングランド国内で投函してもらった(トールマレン 148)。エジェ宛てのラブレターがこうして知人の手により運ばれたことは、彼に手紙を出す行為自体は人に知られてもよいと判断していたことを意味する。エジェの返事が届かずシャーロットは憔悴していくが、手紙に郵便事故の可能性への言及はない。大陸やイングランドの郵便制度を信頼していたか、エジェがあえて返事を出さないことを確信していたか、またはその両方であっただろう。

個人宛に届いた手紙を家族や友人が回覧することはよく行われていたので、シャーロットは自分の手紙がエジェ以外の人に読まれる可能性を容易に推測できた。彼女自身、1839年8月4日付のエレン宛の手紙で、先述したプライスからの求婚の手紙を見せると約束しているし(Smith vol. 1, 198)、後に母が父に送ったラブレターを読んでもいる。シャーロットは、自分が書いた手紙が将来公刊されることを見越して書くことはしなかったが(Barker, *The Brontës: A Life in Letters* “Introduction”)、エジェの家族や知り合いが読む可能性は承知しており、手紙にみられる感情と理性の葛藤は、この認識も一因であろう。以下に1通ずつ紹介する。英訳は書簡集の编者による。

1通目の手紙：1844年7月24日付

この手紙におけるシャーロットの本音は返事が欲しいということに尽きるが、そう表現することを無理に抑制している。まず、自分が書く番ではないがブリュッセルに行く知り合いに運んでもらえるのでこの手紙を書いていると断り、仕事で多忙なエジェを慮った後、“That is why I refrain from uttering a single complaint about your long silence — I would

rather remain six months without hearing from you than add an atom to the burden”と返事がないことに理解を示すが、“though I look on your letters as one of the greatest joys I know, I shall wait patiently to receive them until it pleases and suits you to send them. But all the same I can still write you a little letter from time to time — you have given me permission to do so.”と結局は返事が欲しい気持ちを滲ませ、自分が書くことは許してほしいと言う (Smith vol. 1, 357)。

毎日フランス語の本を半ページ暗記していると報告後、自立の話に移り、寄宿学校からのオファーを断り、私塾開校も前途多難で、創作も眼に負担がかかると書く。そして本を書いて文学の師であるエジェに捧げたいとし、夫人やお子様によろしくと言って一旦手紙を終えるが、同日の追伸で、“I have not asked you to write to me soon because I don’t want to seem importunate — but you are too good to forget that I wish it all the same — yes — I wish for it very much — that is enough — after all, do as you please, Monsieur” (Smith vol. 1, 359) と思いが揺れるままにペンを走らせ、貯金ができたらブリュッセルに行き一瞬でもいいから会いたいと結んでいる。

2通目の手紙：1844年10月24日付

短信で、話題の大部分が手紙についてである。1通目と同様、内容は返事を求めるものだが、調子は明るい。ブリュッセルを通過する知り合いが手紙を届けてくれることになり歓喜していること、それまでに時間もないし迷惑もかけたくないのでこの手紙は長くならないようにするとし、5月と8月に出した手紙が届いたか尋ね、どんなに短い返事でも満足だと伝える。家族の近況報告の後、返事が欲しいと言ってから一旦結び、追伸でエジェにもらった本を製本したことを報告する。

この手紙を書いた1844年秋頃に、『教授』(*The Professor*, 1857) 書き始めたと推定される。11月には、生徒の応募がなかったために私塾開校を諦めた。

3通目の手紙：1845年1月8日

この手紙では、悲痛な調子で返事を要求し、返事を待つ苦しみを訴える。小説風の語りや一般化による間接的な表現と、「私」を主語とする直

接的な表現が交互に表れ、理性と感情が相克する。ミラーの指摘通り、書き出しでは、知人がエジェからの手紙なしで帰国した時の様子をメディアス・レスで始め、知人との会話や自問自答の会話を交え小説的に表現する (Miller 123)。待ちわびた便りがなくことへの失望に、アングリア物語の一節との相似を見てとる研究者もいる (Miller 123-24)。そして “But when one does not complain, and when one wants to master oneself with a tyrant’s grip — one’s faculties rise in revolt” と自分の苦しみを一般化すると同時に、“Forgive me then Monsieur if I take the step of writing to you again — How can I bear my life unless I make an effort to alleviate its sufferings?” と直截に自分の苦しみとこの手紙を書く正当性を訴える (Smith vol. 1, 379)。

また「ルカによる福音書」第16章20～21節を引き、“Monsieur, the poor do not need a great deal to live on — they ask only the crumbs of bread which fall from the rich men’s table — but if they are refused these crumbs — they die of hunger” (Smith vol. 1, 379) と、愛を食物に、愛の欠如を飢餓にたとえる。こららの比喩は後の小説でも繰り返される。そしてこの手紙は読み返したくないのでこのまま送るとし、“there are some cold and rational people who would say on reading it — ‘she is raving’ — My sole revenge is to wish these people — a single day of the torments that I have suffered for eight months” (Smith vol. 1, 379-80) とエジェを間接的に非難する。最後にエジェの幸せと繁栄を祈り、追伸はない。

4通目の手紙：1845年11月18日

4通目の手紙を出す前の9月、シャーロットはエミリーの詩の原稿を偶然見つけ姉妹の詩集を出版することを考え始める。文面からこの半年前の5月18日にも手紙を書いていることがわかる。

まず半年前の5月18日から半年経ったので約束通り手紙が書けると断り、夏と秋が長く耐えるのがつらいとし、“imagine for a moment that one of your children is separated from you by a distance of 160 leagues, and that you have to let six months go by without writing to him, without receiving news of him” (Smith vol. 1, 435) と自分を親、エジェを我が子にたとえる。そして1文に「人」(one)と「私」(I)が混在する文で、エジェを忘れようと

あらゆる努力をしたができなかったことを伝える。

次の段落では父がほぼ視力を失ったと報告し、続く段落ではこの手紙に返事を書くときは、自分やお子さんや学校の生徒や先生たちのことを書いてほしい、友情ではなく同情からで構わないので返事を書いてほしいとお願いする。そして“To forbid me to write to you, to refuse to reply to me — that will be to tear from me the only joy I have on earth” (Smith vol. 1, 436) と訴え、毎日手紙を待っては落胆し、熱っぽく食欲もなく眠れないと書き、1年も待てないので5月にもう1度手紙を書いてよいか尋ねる。英語で追伸をつけ、この手紙は暗いが、聖書にあるように心からあふれることを口は話すのだと説明し (Matthew 12:34; Luke 6:45)、エジェを思い出させるフランス語を愛しているとし、最後にエジェに神の祝福があるように祈る。

以上の4通のラブレターにみるシャーロットの片思いの経験をまとめる。第1に、手紙を書くことは愛することである。手紙には、手紙そのものの言及が多い。両方通行的な人間関係がないため、共有可能な過去の思い出や未来の計画がなく、自分が書く手紙が、2人の唯一の共通の話題であるためである。手紙を書くことは、遠くにいる愛しい人と関係を構築する唯一の手段であり、愛する行為なのである。第2に、手紙を書くことが愛することなら、返事がないことは愛されないことである。これまで郵便制度を大いに利用してきたシャーロットは、遠距離でも意志さえあれば信頼できる郵便網を利用して交流できると知っていた。だからこそ、その交流の拒否は片思いの苦しみを増幅させただろう。文通という相手が必要な行為において、一方的であることは致命的である。第3に、手紙を書くことを禁じられることは、愛することを禁じられることである。自由に愛せないことは、愛されないことと同様か、それ以上に苦痛である。『教授』第23章で、主人公ウィリアムが過去の自分の状態を“many affections and few objects” (*The Professor*, 211) と回顧し、あふれる愛があっても向ける対象のない苦しみを表現している。

この片思いはシャーロットを苦しめたが、同時に作家に必要な洞察力や小説の題材も与えた。ただしこの点は手紙を伴わない恋愛でも同じである。

ではラブレターを書く経験がもたらした利点は何かということ、公刊物の条件となる社会的に許容されやすい形で言いたいことを伝達する技術の向上である。直截な愛情表現を禁止されたために、シャーロットは比喩や一般化を駆使して間接的に感情を言語化した。また、聖書を引用したり、自分を子を思う親にたとえたりすることで、禁断の片思いを安全な形に収める練習をした。このラブレター体験は、相手の立場を慮ると同時に自分の立場もできるだけ守りつつ、抑制がきかない感情をロゴスたる言語に変換する最高の訓練になったといえよう。シャーロットはエジェから直接作文指導を受けるのみならず、間接的にも修辞学を学んだのである。

3. シャーロット・ブロンテが送信したラブレター2：作品出版の試み

私塾開校もエジェからの返事も諦めたシャーロットは、もう1度作家になることを目指す。もう1度というのは、留学前にも有名詩人に手紙で助言を求めたことがあるからである。1836年12月29日にロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) に詩を、1840年11月には、サミュエル・テイラー・コールリッジの息子で詩人のハートリー・コールリッジ (Hartley Coleridge, 1796-1849) に小説『アッシュワース』(*Ashworth*) の冒頭と思われる原稿を送り、両者から返事をもらった。サウジーの1837年3月12日付の返信には、文学は女性の仕事ではないこと、詩作は私的領域で行うべきことが書かれていた。シャーロットはこの桂冠詩人からの手紙の包みに「ロウ・ヘッドに永遠にとどまるようにとのサウジーの助言、1837年4月21日、私の21歳の誕生日」と書き、野心を葬る儀式をした (Barker, *The Brontës* 305)。書いてもよいが表に出してはならないという状況を、シャーロットはエジェに手紙を出すことを制限された時に再体験し、さらに『ヴィレット』(*Villette*, 1853) において、ルーシーが密かに慕うグレアムに対し、本当に書きたいことを書いた手紙と実際に出す手紙の二種類を書いて感情と折り合いをつけ、最後には彼の手紙を校庭に〈埋葬〉する姿にドラマ化する。このようにシャーロットの人生において、作品公刊の試みと片思いの相手への手紙には相似が見られる。

エジェと文通する夢が潰えた時、シャーロットは作品公刊を目指して熱心に手紙を書き始めた。まずエイロット・アンド・ジョーンズ社に、1846

年1月に姉妹の詩を、4月には『教授』、『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)、
『アグネス・グレイ』(*Agnes Grey*, 1847)の原稿を送り出版を打診する。詩集
は5月に同社から自費出版され、『嵐が丘』と『アグネス・グレイ』はニュー
ビー社から出版されるに至ったが、『教授』は死後出版となった。

その『教授』は、出版社への刊行への働きかけの他にも、執筆や内容に
おいてもラブレターの要素を持つ作品である。執筆は、エジェへの2通目
の手紙を出した1844年秋頃に始められ、いわばラブレターを書くことの
代替行為となった。「手紙の禁欲」を強いられる中、次の手紙を書くまで
の時間を小説執筆で埋めたともいえる(Davidson 233)。内容も、エジェと
自分の性別と国籍を入れ替え、ブリュッセルを舞台にイギリス人教師と現
地の生徒が結ばれるという願望を投影した展開で、夢だったエジェへの献
呈には至らなかったが、彼への間接的な愛の告白といえよう。

しかし編集者の意向や読者の嗜好よりも自らの願望充足を優先したため
に、『教授』は多くの出版社から拒否された。この公刊の試みは片思いの
相手へのラブレターに似ている。まず、依頼もなく自主的に書いた原稿で
あるために、構造的に相手が優位でシャーロットが劣位である。また、読
む人の嗜好を無視して自分の願望を自由に表現しても、評価される確率は
低い。そして、返事がなければ心配になり、返事が来ても内容が否定的で
あれば傷つく。ただし原稿がラブレターと違うのは、一社に拒否されても
他の社を試せることである。シャーロットは9回ほど挑戦し、果ては返さ
れた包みの送付先に取消線を引いて新しい送付先を書いて送ることまでし、
その宛先だったスミス・エルダー社が『ジェイン・エア』を出版するに至っ
た。ただしそうして有名作家となった後も、『教授』の出版にこだわり続
けた。

出版打診の手紙とラブレターの理想の形も似ている。それは自分の好き
なことを自由に書き、なおかつ読む人に喜ばれ、よい反応を返されるとい
う相互的で発展的なものである。愛する気持ちを自由に表現して相手に喜
ばれ返事がもらえるという関係が最も成立しやすいのは、自由恋愛が難し
かった当時であれば、婚約者間や夫婦間の文通であろう。そしてシャーロッ
トはその実例を目撃する。

4. シャーロット・ブロンテが閲覧したラブレター：母マライアの父パトリック宛てのラブレター

シャーロットは、利用可能な通信手段を使い思う存分愛情を交換するという、自分がエジェとの間で行いたかったような理想の文通を、近親者の手紙に見出す。婚約期間中に母マライア (Maria Brontë, 1783-1821) が父パトリックに送ったラブレターである。『ジェイン・エア』が好評を博した喜びもつかの間、1848年9月にブランウェル、12月にエミリー、翌1849年5月にアンが死去する。ちょうど『シャーリー』(Shirley, 1849)を執筆中だったシャーロットは、本作を出版するロンドンのスミス・エルダー社の人々との文通によって何とか生きている状態だった (Barker, *The Brontës: A Life in Letters* Introduction)。しかし10月末に『シャーリー』が無事刊行されると、社との連絡は途絶えた。1850年2月、鬱々とする娘を見かねたパトリックが、亡妻マライアの一束のラブレターを手渡す。シャーロットは1850年2月16日頃にエレン宛ての手紙で、この「小事件」が与えた不思議な感動を伝え、母と自分のマインドの関連に思いを馳せている (Smith vol. 2, 347)。

シャーロットの父母は、1812年6月に出会い、2、3か月後には婚約し、早くも同年12月末に結婚した。婚約期間に書かれた現存する9通の手紙に顕著な特徴は、まずマライアが2人が問題なく結婚すると確信していることである。例えば1812年12月5日付の手紙では、楽しみにしていたパトリックからの手紙が来なかったこと、最後の手紙が冷たかったことに抗議してから、自分に不満があるなら言ってほしいとか、自分以上にあなたを愛した人はいないなどと続けている (Wright 171-72)。相手の愛情を感じているからこそ不満と愛情の両方を表現できることは、シャーロットがエジェ宛の手紙においてどちらも抑圧しなければならなかったことと対照的である。

もう1つの特徴は、自分たちの結婚が神意に基づくという認識である。イングランド教会の聖職者の妻となることも、彼女の宗教的意識を鋭敏にしただろう。例えば、1812年9月23日付の手紙の “Oh, what sacred pleasure there is in the idea of spending an eternity together in perfect and uninterrupted bliss!” (Wright 166) には結婚を sacramental なものとする認識が、11月18日付の手紙の “here I freely declare I love you above all the

world besides! I feel very very grateful to the great Autor of all our mercies, for His unspeakable love and condescension towards us” (Wright 170) にはパトリックを愛することが神意に沿うという認識が見てとれる。

マライアのラブレターは、この宗教心を軸に、四半世紀後にシャーロットが親友エレンに宛てた手紙と意外な相似を成す。まず1812年10月3日付のマライアからパトリックへの手紙の一節である。

I feel that my heart is more ready to attach itself to earth than heaven. I sometimes think there never was a mind so dull and inactive as mine is with regard to spiritual things. (Wright 167)

マライアの敬虔さに由来する、天上より地上に惹かれることに対する罪悪感、1837年2月20日頃にシャーロットがエレンに宛てた手紙に書かれた、人間を愛しすぎて神を見失うことの危険と通じ合う。

Why are we to be divided? Surely, Ellen, it must be because we are in danger of loving each other too well; of losing sight of the Creator in idolatry of the creature. (Smith vol. 1, 164)

この一節で同時に目立つのは、まるでラブレターのような文面であることである。この頃シャーロットはロウ・ヘッドに教師として赴任中だったが、エレン宛の手紙ではいつも恋人に対するような口調で訪問をせがんでいる。シャーロットの〈聖人化〉の第一人者ギヤスケルは、その手段となった『シャーロット・ブロンテの生涯』(*The Life of Charlotte Brontë*, 1857)の第8章で、この箇所を、エレンが短期間近隣を離れることを残念がる気持ちの表れとして引用した(Gaskell 120-21)。伝記執筆の取材中にエジェ宛のラブレターを読み、書かれた当時のシャーロットの低調の原因を、妻子ある男性への片思いの苦しみから墮落する弟ブランウェルへの心配へとすり替えたギヤスケルも、同性であるエレンへの熱烈な感情は公表しても問題ないと判断したのだ。バーカーは、シャーロットがこの頃信仰上の危機状態にあり、その中でエレンを敬虔さの模範とみなすようになったとする(Barker,

The Brontës 329)。この時期の手紙を読んだギヤスケルが、シャーロットの〈情熱〉が信仰心に由来すると判断した可能性は大いにある。であるなら、敬虔なマライアが聖職者の婚約者パトリックに書いた手紙と、宗教的思索にふけるシャーロットが敬虔な親友に宛てた手紙の文面が、結果として相似したといえるだろう。

ギヤスケルが引用を控えなかったもう1つの理由として、19世紀中期特有の文化が挙げられる。レズビアニズムの概念が現れ始める1890年代以前の1830年から1880年のイギリスにおいて、女性同士の友情は、女らしさを促進するとして奨励され、女性の人生の中心にあり、異性との結婚生活とも共存するものであった(Marcus 1-2, 5-7, 26)。結婚が重視された時代においては、反道徳的な異性間の恋愛よりも女性同士の結婚の方が容認されやすかった(Marcus 1, 21)。女性は女友達に毎日のようにロマンティックな言葉遣いで手紙を書いた(Marcus 16)。この文化も一因となり、シャーロットは情熱的な手紙を書き、ギヤスケルもそれを隠ぺいするのを感じなかったといえる。

マライアのラブレターは、シャーロットの手紙のみならず公刊物とも不思議な交錯を見せる。まず上の引用部分を読んだシャーロットは、度會も指摘するように(81)、母の思いが、奇しくも既に刊行した『ジェイン・エア』で婚約中のジェインがロチェスターに対して抱いた思いに似ていることに気づいたに違いない。次の一節は第2巻第9章からである。

My future husband was becoming to me my whole world; and more than the world: almost my hope of heaven. He stood between me and every thought of religion, as an eclipse intervenes between man and the broad sun. I could not, in those days, see God for His creature: of whom I had made an idol. (*Jane Eyre*, 267)

婚約者間の相思相愛の文通は、3年後に刊行される『ヴィレット』で、ルーシーが西インド諸島に赴任する婚約者ポールから理想の手紙を受け取り続けるという設定においてドラマ化される。さらにこの『ヴィレット』の原稿は、それを読む出版社社長への一種のラブレターの様相を帯びたのであ

る。

5. シャーロット・ブロンテが送信したラブレター3：『ヴィレット』の原稿

『ヴィレット』執筆当時、シャーロットはスミス・エルダー社の社長ジョージ・スミス (George Smith, 1824-1901) を慕っていた。スミスは創業者の息子で、『ジェイン・エア』の出版により社の名声と利益を高め、1860年に『コーンヒル・マガジン』(*Cornhill Magazine*, 1860-1975) を創刊した人物である。彼はシャーロットが「カラー・ベル」の匿名を使い続けた唯一の文通相手で、男性名で書くことで社会的制約から解放されたのか、手紙で恋の戯れのようなことをした (Barker, *The Brontës* 736)。

3巻本『ヴィレット』は、手紙を重要モチーフとして4組のカップルを描く作品で (川崎「ブロンテと手紙」13-14)、ルーシーが第2巻まで片思いをするグレアムは、スミスをモデルとしている。そのためスミスへの原稿送付は、作品の出来を判断してもらうのみならず、バーカーも指摘するように、自分の思いが投影された人物やプロット展開に対する彼の反応をうかがうことでもあった (Barker, *The Brontës* 830-31)。公に向けて出版される作品が、特定の個人宛のラブレターの機能を持った珍しい例である。1852年10月30日に、ルーシーがグレアムに恋をし彼からの手紙を校庭に埋めるところまでを描いた最初の2巻分の原稿を送ると、肯定的な返事が来た。ところが11月20日にルーシーがグレアムを忘れポールと婚約する第3巻分を送ったところ、10日経っても返信がなく、内容に失望したのか心配になったシャーロットは、12月1日に手紙を送った。6日に添え状なしで原稿料の銀行手形のみが届くとパニックになり、ロンドンに駆け付けようとするが、翌朝スミスから手紙が届き一件落着となった (Barker, *The Brontës* 831-35)。シャーロットは片思いの相手から返事がないことによる動揺を再び経験したのである (川崎「ブロンテと手紙」7)。

その直後の1852年12月13日、シャーロットは父の助任司祭だったニコルズから求婚される。この時は断ったものの、失意で憔悴する姿に次第に同情をおぼえ、彼の手紙に徐々に返事をするようになる。結婚に反対する父に秘密で続けた文通は、生涯で最初で最後の相思相愛のラブレター体験となった。1854年6月29日に2人は結婚し、結末で正式に結婚したジェイ

ンとロチェスターのように、もはや文通を必要としない関係になった。翌1855年3月31日にシャーロットは死去した。

6. シャーロット・ブロンテがエジェに送ったラブレターの公開

シャーロットの私生活で重要なツールであった手紙は、彼女の死後さらに公的にも存在感を強めることになる。父パトリックの依頼によりギヤスケルが執筆した『シャーロット・ブロンテの生涯』のかなりの部分がシャーロットの手紙で構成されていたのである。シャーロットはもはや語り手の1人であった(長瀬261)。手紙は、郵便制度の発展とともに、巨大で直接見ることができない郵便システムを潜り抜けることでその信憑性を増し、内容を保証するためによく伝記で引用された(宮丸171-72)。ギヤスケルの伝記は、1857年の刊行後センセーションを巻き起こし、シャーロットのような女性はどうやってあれほど情熱的な作品を書けたのかを探ろうとした人々によって熱心に読まれた(Barker, *The Brontës* 938)。生前彼女が人生を開拓する際の強力な手段であった手紙は、死後シャーロットという人物を探索するための第一の資料になったのである。

ギヤスケルがシャーロットの手紙群を編集して達成したのは、家庭の義務を果たしつつ文学に従事した女性というヴィクトリア朝の価値観に沿う人物形成である。第13章にはエジェ宛の1通目と2通目のラブレターの抜粋も引用されたが、それらはギヤスケルの依頼によりエジェ自身が選んだ部分のうち、さらに不適當と判断した部分を除いて引用したものである(Smith vol. 1, 359, 371)。具体的には、本を書きエジェに捧げたいが文学の道は厳しいと語っている部分や(Gaskell 221-22)、フランス語の勉強を続けておりお金が溜まったらブリュッセルに行きたいことを書いた部分などで(Gaskell 224)、ギヤスケルが設定した伝記の枠組みに違和感なく収まっている。ヴィクトリア朝の〈聖人伝〉からは、妻子ある男性への片思いは除外するしかなかった。それどころかギヤスケルは、小説において恋愛の情熱を大胆に表現した友人が批判されないよう、シャーロットのセクシュアリティを感じさせる要素そのものを排除した(長瀬212)。

だからこそ半世紀後にエジェ宛のラブレターが公開されると、再びセンセーションが巻き起こった。1913年6月にエジェの息子が大英博物館に

寄付した4通のラブレターが、7月29日付の『タイムズ』紙で英訳を付し初公開されたのだ。時はあたかも、フロイトの精神分析が、性はその人の重要な要素であるという認識を広め始めた頃である。シャーロットの〈情熱〉が顕れたこれらの手紙は、〈聖人像〉の修正を迫った (Harman 204; Miller 120; Alexander and Smith 45; Sutherland 75-76)。伝記作家たちには、彼女の〈無垢〉を死守しようとする動きと、彼女の性的側面を積極的に検討する動きの両方が起きた (Miller 129-34)。しかし第二次世界大戦の戦雲がたれ込め、イギリスが自国の古典を確立し西側諸国の価値観を称揚しようとしていた1939年10月、ウェストミンスター寺院にブロンテ三姉妹の記念碑が設置され、11月にはあの『タイムズ』紙がシャーロットとエミリーが英語圏文学の最高の誉れに列すると称賛した (Stoneman, *Brontë Transformations* 130)。エジェへのラブレターは、シャーロットの文学的功績には影響しなかったのである。

結：公的なものと私的なもの

本論ではラブレターを軸に、シャーロット・ブロンテの公と私の様々な結びつきをみた。まず、シャーロットは公的な郵便制度を活用して私信を発信し、人生を開拓した。留学から帰国後エジェに手紙を書いたが、送信を半年に1度に制限され、書きたい思いを満たすかのように『教授』を書く。結局文通は成立せず、返事を求めることに注いだ情熱は、詩や『教授』の公刊に対象を移した。その『教授』は、内容的にもエジェへの思いに満ち、エジェに捧げればラブレターになるものであった。『教授』の拡大改訂版といえる『ヴィレット』は、さらに複数の位相でラブレターにかかわり、内容的にラブレターが重要なモチーフになるとともに、その原稿が出版社社長に作者の恋心を伝えた。

ただし私信と公刊物の関係は複雑であり、必ずしも手紙をめぐる経験が先で創作が後というわけではない。シャーロットは子どもの頃からきょうだいたちと創作を始め、10代半ばから手紙を書き始めた。創作において、様々なキャラクターを作り、そのキャラクターが取りそうな行動や言いそうな台詞を想像することは、手紙を書くことにおいて、受取人と用途に応じて異なるペルソナを使い分けることに似ている。サミュエル・リチャー

ドソン (Samuel Richardson, 1689-1761) が他人になり切ってラブレターを書くうちに書簡体小説を創作するようになったように、手紙を書くことと小説を書くことは、連続しているのである。シャーロットの場合も、いずれもペンをもち紙に文を書くという身体的行為において、手紙で培った技術が創作に作用し、同様に創作で開花した能力が手紙書きにも発揮されるという状態であっただろう。この点で彼女の執筆におけるノンフィクションとフィクションの境界も曖昧となる。そして死後、シャーロットの最も私的な手紙であるエジェ宛のラブレターが、有力メディアで公開され世界中に知られることになった。その後彼女の公刊物を読む人は、この伝記的事実を多かれ少なかれ作品に投影して読むことになる。このようにラブレターを軸にみるシャーロット・ブロンテの公と私は、実に複雑かつ不可分に絡み合っているのである。

* 本稿は日本ヴィクトリア朝文化研究学会第20回全国大会 (2020年11月28日) のシンポジウム「ヴィクトリア朝の書簡 ―国政から私信まで」における発表「ブロンテ姉妹のラブレター ―恋愛における手紙の功罪」の原稿に加筆修正したものである。

参考文献

- 川崎明子「ブロンテと手紙 ―― もう一つのテキスト世界」『駒澤大学文学部研究紀要』第71号、2013年、pp. 1-19.
- 『ブロンテ小説における病いと看護』春風社、2015年.
- トールマレン、マリアン編『歴史の中のブロンテ』内田能嗣・海老根宏監修、大阪教育図書 2016年.
- 内藤陽介『英国郵便史 ペニー・ブラック物語』日本郵趣出版、2015年.
- 長瀬久子『エリザベス・ギaskellとシャーロット・ブロンテ ―― その交友の軌跡と成果』英宝社、2011年.
- 星名定雄『郵便の文化史 ―― イギリスを中心として ――』みすず書房、1982年.
- 松岡光治編『ギaskellで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化 生誕二百年記念』溪水社、2010年.
- 宮丸裕二『郵便 ―― 鉄道と郵政改革が見せた世界 ――』松岡 pp. 159-76.
- 度會好一『ラヴ・レター 性愛と結婚の文化を読む』南雲堂、1994年.
- Alexander, Christine and Margaret Smith. *The Oxford Companion to the Brontës*.

- Anniversary edition, Oxford UP, 2018.
- Barker, Juliet. *The Brontës*. 2nd ed., Pegasus, 2012. (ジュリエット・バーカー『ブロンテ家の人々』中岡洋・内田能嗣監訳、彩流社、2006年。上下巻。)
- . *The Brontës: A Life in Letters*. Little, Brown, 2016 [1997].
- Brontë, Charlotte. *The Professor*. Oxford UP, 1998.
- . *Jane Eyre*. Oxford UP, 2019.
- Campbell-Smith, Duncan. *Masters of the Post: The Authorized History of the Royal Mail*. Penguin, 2011.
- Davidson, Cathy N. *The Book of Love: Writers and Their Love Letters*. Pocket, 1992. (キャシー・N・デイヴィッドソン編『恋する作家たち 107通のラブレター』出渕敬子監・共訳、DHC、1994年。)
- Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Harman, Claire. *Charlotte Brontë: A Life*. Penguin, 2015.
- Kawasaki, Akiko. "Translating and Transmitting Illness: Charlotte Brontë and Victorian Informatics." *Poetica*, vol. 79, 2013, pp. 115-26.
- Marcus, Sharon. *Between Women: Friendship, Desire, and Marriage in Victorian England*. Princeton UP, 2007.
- Miller, Lucasta. *The Brontë Myth*. Anchor, 2005.
- Smith, Margaret, editor. *The Letters of Charlotte Brontë with a Selection of Letters by Family and Friends*. Oxford UP, 1995-2004. 3 vols.
- Stoneman, Patsy. *Brontë Transformations: The Cultural Dissemination of Jane Eyre and Wuthering Heights*. 2nd ed. Edward Everett Root, 2018.
- Sutherland, John. *The Brontësaurus: An A-Z of Charlotte, Emily & Anne Brontë (& Branwell)*. Icon, 2016.
- Wright, Sharon. *The Mother of the Brontës: When Maria Met Patrick*. Pen and Sword, 2019.

一駒澤大学教授

Summary

Charlotte Brontë's Love Letters: The Relationship between the Public and the Private

Akiko Kawasaki

This essay examines the love letter experience of Charlotte Brontë (1816-55) to illuminate the unique relationship between the public and the private in her life. She is one of many Victorians who enjoyed the newly introduced Uniform Penny Post: while staying in a retired Yorkshire village, she managed to socialize with friends, arrange learning French in Belgium, plan to start a school, publish her literary works, and receive and send love letters. She spent much of her time not only in fiction-writing but also in letter-writing; these two facilitated and influenced each other throughout her life.

The essay first looks briefly at the three kinds of love letters she received: Valentine's Day cards, letters of marriage proposal, and fan letters. It then analyzes the four letters she sent from England to her former French and Rhetoric teacher in Brussels, Constantin Heger (1809-96), a married man with children whom she loved in vain. In each of the letters she demanded his reply but only indirectly and creatively: using a novelistic narration, generalizing her suffering with metaphors, quoting from the Bible, and so on. The essay then widens the definition of the love letter to investigate her letters to publishers to ask for the publication of her literary works, her intimate letters to her female friend, and the manuscript of *Villette* (1853) whose contents conveyed her romantic feelings toward its publisher. It also discusses the ideal love letter that Brontë witnessed, namely the letters her mother Maria sent to her father Patrick during their engagement.

